Japanese association of educational psychology

道徳教育に生かす心理学的アプローチ

企　画　者　渡辺弥生（法政大学）　　司　会　者　大西文行（横浜市立大学）
話題提供者　縣　邦彦（上越教育大学）　小野寺正己（盛岡市子ども科学館）
河村茂雄（都留文科大学）　林　泰成（上越教育大学）　松村　亨（鳴門教育大学）
山崎勝之（鳴門教育大学）　吉永範子（静岡県相良町立相良小学校）
指定討論者　首藤敏元（埼玉大学）

人格形成の基盤を培い、「生きる力」を獲得させていくために、道徳教育の重要性は以前にもまして強いものとなっている。現代社会のモラルハザードを食い止め、豊かな人間性を育てるためには、幼児期、児童期からの道徳教育が非常に重要である。家庭教育はもちろんであるが、学校教育における道徳教育の充実に、より一層力を入れて取り組む必要性がある。道徳の時間をかなめに、教育活動全体を通じて、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を養うことを目標とするためには、思い切った斬新なカリキュラムと授業の工夫や弾力化が求められる。

本シンポジウムでは、従来の副読本の読み聞かせやビデオの視聴といった教授方法ではなく、子どもが主体的に取り組むことができる様々な心理学的アプローチを紹介することを目的とする。

モラル・スキル・トレーニングの構想

林泰成・縣邦彦（上越教育大学）

ソーシャル・スキル・トレーニングを取り入れた道徳授業がある。しかし、そうした試みに対しては、道徳教育研究者から批判の声があがる。それが道徳教育といえるのかどうかが十分に検討されているとはいいがたいからである。たしかに、ソーシャル・スキル・トレーニングは、子どもたちの自尊感情を高め、社会性のない子どもや引っ込み思案の子どもに対して効果的であると報告されている。しかし、一方で、たとえば詐欺のように、ソーシャル・スキルを有効に利用した犯罪もある。また学校でも、ソーシャル・スキルに長けた子どもが集団をうまくコントロールして、自分は表に出ずに特定の個人をいじめるというようなことが起こったりもする。ソーシャル・スキル・トレーニングに意味がないということではない。道徳教育のねらいに合っているかどうが問題なのである。そして、心理学的なアプローチを用いようとする場合、往々にしてそういった視点が抜け落ちるように思われる。

そこで、私たちは、つねに道徳場面を想定したソーシャル・スキル・トレーニングとして、「モラル・スキル・トレーニング（MoST）」を構想した。

道徳教育としてモラル・スキル・トレーニングを考える場合、社会性の向上が図られればそれでよいというわけにはいかない。やはり、道徳性の向上が企図されなければならない。したがって、開発されたプログラムについては、道徳性の変化を網羅的にチェックしなければならない。

今回は、小学校高学年と低学年用の試行的なプログラムを紹介し、その効果を道徳性診断テストHEARTを用いて確認した結果について紹介する。さらに、そのことを通して、道徳教育における心理学的アプローチの在り方について考察する。

VLFによる思いやり育成プログラム

渡辺弥生（法政大学）・吉永範子（相良小学校）

子ども達の人格形成において、自分を大切にし、豊かにたくましく生きる力を獲得することは大切である。この自分を大切にする心を育てることは、発達的に考えると他人の心を大切にすることとつながってくる。自分が自分を実感をもって感じるためには、他人にも自分と同じような視点があり、自分はこの世に存在するたくさんの人間のうちの一人であることを知ることが求められる。

VLF（Voices of Love and Freedom）教育プログラムは、相手の身になって考え、相手の気持ちや状況を正しくとらえながら行動できる力（役割取得能力）を道徳価値の基盤におき、この力を獲得することによって、様々な道徳的価値が分化して育っていくと考えている。この数年間で幼児から高校生までを対象に、授業実践が試みられているが、子ども達が生き生きと興味をもって取り組み、行動の変化だけではなく、認知面、感情面にも変化が見られることが教師から報告されている。

結びつき（教師と生徒の信頼関係の形成と自己

NII-Electronic Library Service

Japanese association of educational psychology

開示)、話し合い(テーマに感情移入し、話し手、聞き手の経験)、実践(対人葛藤を自分のものとし実際に行動)、表現(書く、描くという表現活動)といった4つのステップを通して、ﾓﾃﾞﾘﾝｸﾞ、ﾊﾟｰﾄﾅｰｲﾝﾀﾋﾞｭｰ、ﾛｰﾙﾌﾟﾚｲ、問題解決のABC、葛藤のｴｽｶﾚｰﾀｰなど心理学的に効果が明らかな手法が、教師の工夫のもとに駆使されている。

実際に実施するうえで留意すべきことは、子どもの道徳性の現状をしっかりとアセスメントすることである。クラスの実態や個人差を把握したうえで授業を展開し、授業後のポストアセスメントを通して、子どもの変化を確認することが、つぎの授業を重ねるうえでも大切である。実践はまだ始まったばかりであるが、自分と他者との関わりを通して互いを理解し、共感していくことの大切さを感じ取る方法として有効に思われる。

「心の教育」の中における道徳教育

河村茂雄(都留文科大)・小野寺正己(鹿嶋市子ども科学館)

文部省が「心の教育」を掲げてから，教育現場において「心」という抽象的な内容の具現化が試みられている。その中の1つに，子ども同士の人間関係に注目した構成的グループ・エンカウンターやソーシャル・スキル・トレーニング等を実施する学校が増えてきている。

確かに現在，おかれている環境ゆえ，人間関係をうまく結べない子どもが多くなっている。よって学校においては，意識して集団の中で他者へ配慮したりかかわったりするスキルやそうすることの意味や考え方も教えていくことが求められているのだと考える。

子どもたちは，そのような取り組みの中で，他者の気持ちを推し量り，どのような行動をとることが他者や社会から受け入れられ，自分にとっても心地よいのかを学ぶことになる。つまり，子どもたちは，このような集団体験を通しソーシャル・スキルを身につけるだけではなく，道徳性も身につけるのではないかと考える。

コールバーグは，道徳性の発達において，「何をすべきか」といった行動や価値ではなく，「なぜそうすべきなのか」という判断や考えを重視したという。子どもたちにとっては，行動する中でその判断や価値が育つことを鑑みると，「心の教育」として行われている人間関係に注目した取り組みは，道徳教育にもつながっているのではないかと思われる。

当然，コールバーグが指摘するように，道徳性の発達をもたらす集団とそうではない集団があると思われることから，集団内で人間関係に注目した取り組みを行う際には，集団の状況を的確に把握することが不可欠であることは必要条件であると考える。

自律性を高める意義とその教育

山崎勝之・松村亨(鳴門教育大学)

道徳にしろ健康にしろ，その問題性をもたらすおおもとの原因として性格のあり方が指摘される場合が多い。道徳性などでも，道徳心を形成する土台として，自律性という性格の必要性が強調される。この自律性は，近年，健康との関連や生きる力の構成要素として注目されれている特性であるが，この特性の高まりは，セルフ・エスティームの向上や道徳心の育成を円滑にする心的状態をもたらすものと考えられる。

これまでの学校教育では，こうした性格の改善に取り組む組織的な試みは皆無であったが，山崎(2000)は，性格を構成する認知・感情・行動の諸特徴とその歪みに焦点を当て，そうした構成要素の変容を行動科学的に達成することから性格のより良いあり方をはかる教育理論と手法を構築している。その教育は総称してフィークス(Psychological Health Education in Elementary-school Classes by Schoolteachers: PHEECS)と呼ばれるが，その中には複数のプログラムが用意され，学校現場で実践されている。フィークスでは，心理学を中心とした多様な理論や技法が柔軟に取り入れられ，科学的な効果評価のもとにその教育効果が決定される。また，このプログラム群では，その多くが自律的な性格の変容をめざす特徴をもっているが，なかでも最近松村・山崎(2002)によって考案された自律性向上プログラムは総合的な特徴をもつ完成度の高いプログラムで，一学期間をついやす規模をもっている。

本シンポジウムの発表では，この自律性向上プログラムの構成と具体的実践例を紹介するとともに，多面的に展開される評価方法の詳細と具体的評価結果を提示する。そして，このようなプログラムを学校で恒常的に実践する可能性とその必要性について，新教育課程との整合性も含めて考察する予定である。

NII-Electronic Library Service